

学位論文審査の結果の要旨

| | | | |
|--|---|----|------|
| 報告番号 | 甲 第11号 | | |
| 所属 | 保健学専攻 生涯保健学分野 成人保健学領域 | 氏名 | 大江 厚 |
| 学位論文題目 | Characteristics of Trunk Control During Crook-lying Unilateral Leg Raising in Different Types of Chronic Low Back Pain Patients (慢性腰痛患者のタイプの違いにおける片脚下肢挙上時の体幹制御様式の特徴) | | |
| 論文審査担当者 | 主査 百瀬 公人 副査 横川 吉晴 , Goh Ah Cheng | | |
| (学位論文審査の結果の要旨) | | | |
| <p>今回の研究は非特異的慢性腰痛患者を対象に、腰椎を運動した際の腰痛発現運動方向によって分類されるタイプの違いにおける片脚下肢挙上時の腰部の動きと体幹筋活動様式の特徴の関係性を明らかにすることを目的とした。方法は下肢症状を伴わない腰痛患者のうち、腰痛が3カ月以上続いていて、X線およびMRI画像上で器質的な変化を認めない慢性腰痛患者30名を、HallのLow Back Pain Classification Systemに基づいて、腰椎屈曲動作で腰痛が増悪する屈曲型腰痛群13名と、腰椎伸展動作で腰痛が増悪する伸展型腰痛群17名に分類し、背臥位で股関節60度屈曲位から、腰痛群は腰痛側、対照群は効き足側の片側下肢を股関節屈曲90度位まで3秒かけて挙上するという運動課題を行い、運動課題中の腰部の動きに伴って変化する腰部とベッド間の圧変化と、表在及び深部の体幹筋の筋活動について、表面筋電計および超音波画像診断装置を用いて測定した。また、体幹から下肢にかけて整形外科的疾患とその既往の無い健常者30名を対照群として同様の計測を行った。その結果、片側下肢挙上動作開始時の腰部圧の変化は対照群および屈曲型腰痛群において伸展型腰痛群より有意に低下していた。また、片側下肢挙上動作開始時の体幹筋活動に関しては、両側の外腹斜筋の筋活動が対照群および屈曲型腰痛群において伸展型腰痛群より有意に低下していた。</p> <p>この研究の目的は独自性が高く、また臨床応用にも富んだ内容である。また、結果において明らかになったことは、伸展型腰痛群にとって、片側下肢挙上動作開始時の腰椎の伸展方向への運動は腰痛を増悪させる運動方向であるため、本研究で伸展型腰痛群が示した体幹の運動制御様式は、腰痛を増悪を回避するために無意識的に自己組織化された代償的な運動制御の結果である可能性が考えられる。したがって、非特異的慢性腰痛患者の四肢動作時における体幹制御様式の特徴は、腰椎の腰痛発現運動方向に基づいて分類された腰痛タイプによって異なることが示唆された。これは腰痛患者の動作には疼痛が影響して特有の運動を学習していることを示唆しており、腰痛患者の評価や治療への新しい戦略を考えるうえでも重要であると思われる。</p> <p>このような新しい知見が得られたことを分かりやすく発表し、また質疑応答においても十分な説明を行っていた。</p> <p>以上の結果より、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p> | | | |